

# 短期大学における「心の教育」の展開 1

## －価値への近接－

Practice “moral Education” in Junior college 1  
－ Approach the Value －

安部 孝  
(こども学科 専任講師)

**要旨** 保育者を目指す学生の「心の教育」に対する関心は高く、教員・保育者養成にあたっては、その実践力の育成と学生に対する「心の教育」に取り組み、その実践検討を通し、改善を図ることは重要な課題である。学生の「心の教育」につながる内面的関心の一つに「ボランティア精神」の問題があるが、本研究は、「ボランティアとNPO」の授業実践を根拠に、学生の認識が「ボランティア精神」の本来の価値（精神）に近接し得ることを確認し、さらに新たな課題について考察したものである。具体的な実践展開となる課題解決型学習の各段階では、人間の生活場面における様々な心理、状況、判断などについての考察を行った。学生は「気付き」を繰り返しながら「ボランティア精神」に近接し、また関連するであろう価値（自他の関係性や自利利他の精神）に気付くことができた。価値への「気付き」の中に「心の教育」の可能性を見出すことができたと考えられる。

【キーワード：心の教育 価値 ボランティア精神】

### I はじめに

保育者を目指す学生の「心の教育」への関心は高い。それは道徳教育に留まるものではなく、いわゆる心－内面への幅広い関心である。つまり、学生にとっての幼児理解においては、目前の幼児の内面理解が関心事項であり、そこに教育・保育実践の手掛かりを見出そうとしていられる。〈子供が好きである〉という学生の大切にす心情の一つに“優しさ”があげられよう。その“優しさ”とは、道徳教育に掲げられる価値や徳目で、「思いやり」や「温かい心」、「親切」、「自然愛護」など様々な関連しながら学習や生活場面で学び取られた内面価値であるが、そうした価値として学び直されることはないにしろ、自然な心根として生活の中で生まれ、その時々が発露してきたものである。つまり、保育者をめざす学生が、そうした心情に基づく具体的な実践として保育ボランティア活動への取り組みを選択することは、ごく自然なことと考えられる。

本研究は、平成19年度後期授業科目である「ボランティアとNPO」における、様々な生活事象に対する考察を通じた学生のボランティア精神についての認識の変容を探り、ボランティア精神の本質的課題への気付きと、そこに埋め込まれた価値への近接の可能性を検討し、保育者養成におけ

る「心の教育」の展開の可能性を確認するものである。同時に、学生が自らの心情を確認しながらボランティア活動や子供への関わりを真摯に考えていくことができるような反省観点としての「立ち位置」やそのことへの気付きを作り上げていく過程を実践の中に捉え直していくものである。

人間生活や文化には既に埋め込まれた道徳的な価値があり、共通の文化、社会生活を営む人間にもそれが埋め込まれている。生活の振り返りや気付きを通して、ボランティア精神を含め、様々な価値への近接を図ることが、心の教育の成果でもあると考える。

### II 方法

ボランティア精神とは内面的課題であり、ボランティア活動はそれに基づくものである。したがってボランティア活動に取り組んだ自身もそこに関わった他者もその内面的な充実を得ることが望ましい。そこで、ボランティアを学習内容として取り上げる「ボランティアとNPO」の授業において明らかにされた学生のボランティアに関する認識を基に、「気付き」を活かした学習を展開し、その時々学生の認識の変容を活かし、いくつかの生活場面の資料提示を行いながらボランティア精神について考察させていく。最終的に、学生の

理解や考察内容、そして、新たに辿り着いた認識をアンケート等によって調査し、それらを「心の教育」という視点で捉え直す。さらにその成果や課題を基に、ある価値への近接と、そのための学習過程の可能性や課題について考察する。

なお、紙幅の都合上、学習の構想や、展開における取り組みと考察等を本稿「短期大学における『心の教育』の展開1 ―価値への近接―」に、また、学習の展開の中で、特に後半部分や、全体的な考察を「短期大学における『心の教育』の展開2 ―価値への近接―」にまとめた。

Ⅲ ボランティアについて…従来の意味をもとに  
「ボランティア」には本来「義勇」や「志願」、「奉仕」などの意味がある。しかし、本研究で扱う学生にとってのボランティアとは保育ボランティアであり、子供とのより良い関係作りを目的とした活動である。学生にとってのそれは、子供や保育、保育場対応への“慣れ”の機会であり、子供への好意や好意的関心を前提とした保育者としての資質向上を望む取り組みである。つまり、保育者としてのスキルの向上を図ろうとする目的において、多くの場合それらの活動は、学習的体験活動や実習事前活動、または、学習観察を目的とする保育や実習につながる活動と言うことができる。ところが、中には、報酬を得る場合や就職への有利なつながりがもたらされる場合もあり、なによりも取り組んだ学生が当初の動機以外の状況に当惑してしまうこともある。つまり、様々な社会の状況のもとで、養成校におけるボランティアについての認識が、図らずも本来の枠組みを越えたものに変容していると言えよう。

では、ボランティアに取り組むという学生自身のねらいは、本当に達成されるのだろうか。本人たちの関心や意図、また、本来性との齟齬が露顕される現実の中で、対象となる子供たちとの望んでいた関係は成就されるのだろうか。

本研究中の「ボランティアとNPO」の授業においては、ボランティア精神以外にボランティア（精神）と近接すると考えられる価値やそれらを含む概念を考察の対象として提示している。それは、愛、奉仕、無償などであり、奉仕については、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」に読みとることができる奉仕の精神を紹介し、慈悲や菩薩など宗教に

説かれている価値について考察する手掛かりとさせた。さらに、愛や慈悲などの違いなどにも気付かせ、またそれらに無償の価値を関連させながら、通常語られる「愛」の多義性の確認を図った。

こうしたボランティア精神につながりをもつ言葉についての理解が、学習の過程で学生自身の考察の拡がりや深化を図り、ボランティアについて一層深く考察する手掛かりとなった。

#### Ⅳ 「ボランティアとNPO」の概要

##### 1. 学生の実態

「ボランティアとNPO」を受講する学生は、7名の本学1年生であり、いずれも将来保育者をめざす目的を抱いており、その目的との関連で保育ボランティアへの取り組みを考えていた。

##### 1) 学生におけるボランティアに対するイメージとボランティア観

学習の導入段階では、これまでの自分のボランティアに対する認識を振り返らせた。自身における認識を明らかにさせることで学習過程における振り返りやその時々への気付きを一層有効に導くことができると考える。

学生の「ボランティアに対するイメージ」は、①手助け・手伝い ②子供の立場やアイデアを尊重した活動 ③一緒にみんなで何かを行う（こと） ④見守る（スタンスで行うこと）などであった。

これらから言えることは、学生には、すでに「保育・教育」という状況を前提とした「保育者・教師」としての立場を意識したとらえがあり、「私の活動」として、「他者・対象（子供）」を必要とした活動をイメージしているということである。この場合、イメージはあくまでも未体験なボランティアシーンに起因する想像によるものであるが、そのイメージシーンの構成要素には、すでに（不特定な）「子供」という「自分を頼る存在」が含まれているのである。

では、学生たちのイメージシーンを越えたボランティア観とはどのようなものか。当初抱いていたボランティアのイメージについての説明から、ボランティア観が次のように明らかになってきた。①（そもそも）

ボランティアには漠然としたイメージを持っていただけだった ②(他の姿、世間によくある姿として) ゴミ拾いのイメージ

③手伝い ④「私」にとってのボランティア ⑤「参加しなければならない」こと…そうした義務感があって(そこに)面倒くささがある ⑥人に勧められて(勧められたこと) ⑦(とにかく)参加すること(そのもの)が目的 などである。

これから学生は多くの場合、本来自主的展開が期待される中で、義務感を伴ったり、根拠が不明なまま(他に言われるから)取り組もうとしたり、関心をもったりしていたことになる。そこで語られるボランティアとは、およそ自分を追いつめるものであり、取り敢えず何であれ経験できる機会であると言える。つまり、その次元においては追いつめられた自分の行き場としての活動の状況と条件としての対象を選択し獲得することが重要な先決課題となっている場合もあると考えることができる。

この段階ではボランティアの一般的な意味と学生自身が抱いていたイメージやボランティア観とを比較してはいない。しかし、学生は、これらのイメージや自身のボランティア観を明らかにすることによって、

「私」という存在と「私」以外…そもそも私がそうする条件や状況を構成する存在(があるということ)に気付くことができた。

それは、自身を越えた関係性や自身を包摂する関係性、そこに存在する自身と他者、そして、目的と両者の関係性を成立させる現実的な働きとしてのボランティアへの気付きであると言える。

この段階で、ボランティアのイメージやボランティア観を明らかにさせることは、それまでのイメージや考えを否定せずに、自分の取り組みや、取り組む自分の存在、そしてそれを包摂し、成立させる関係性に気付かせる点において有意義だったと考えられる。

## 2. 学習課題と課題設定の観点

これまでの学習過程で考察し、明らかにした、学生の抱くイメージ、改めて捉え直したボランティア観を基にボランティア活動の意味とボランティア精神について考察するための4つの観点を取り入れた学習課題を設定する。最終的には各段階の学習を一つの手がかりにしながら、ボランティアという表現に込められた人間の心の働きに気付かせ、様々な人間やその関係性に至る流れをもたせるようにしていく。

【図1：学習課題とねらい】

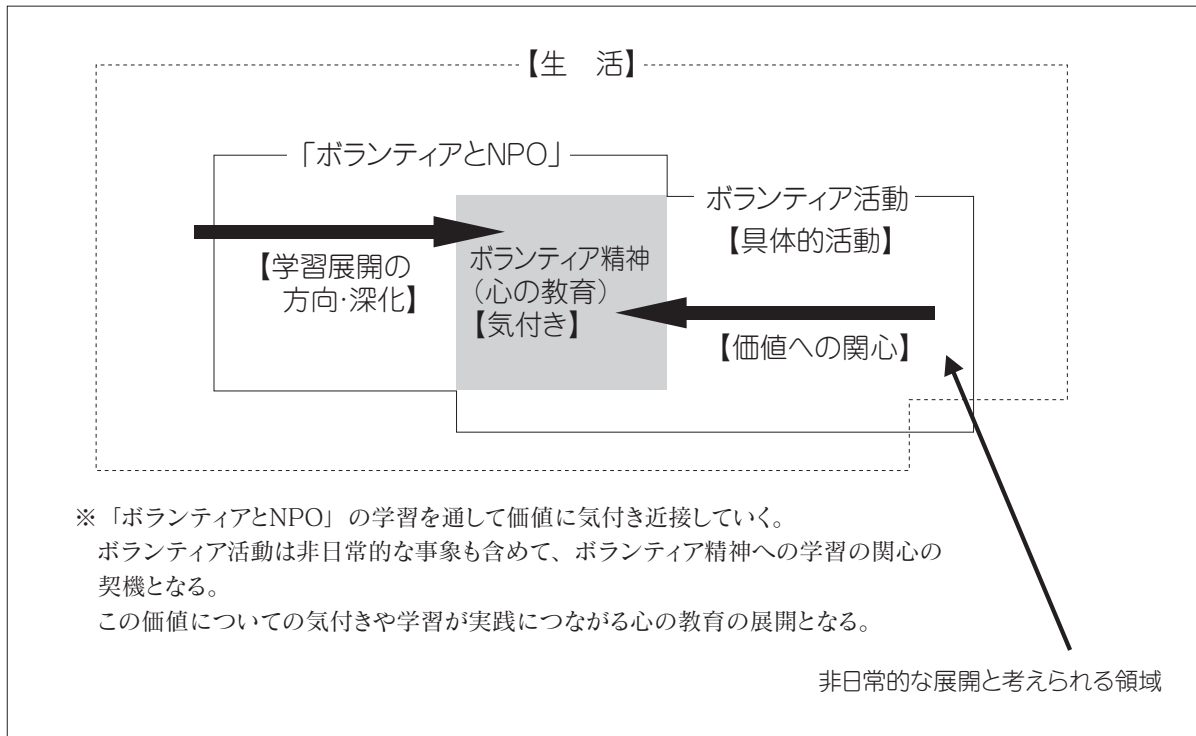
学 習 課 題 (4観点)	ね ら い
①ボランティア《奉仕者》の本来の意味	○本来性の確認 「違い」や「変化」を否定せず、本来性に対する過去のまた、現在の自己の発見
②「私の活動としてのボランティア」	○学生の実態としての経験の振り返り
③他者の存在を踏まえたボランティア活動 ④自他の関係におけるボランティア活動	○「他者」との関係性における問題としての認識 ○経験やイメージにおける確認。関心の視点
⑤「ボランティア」の「理由・条件・限界」 →「ボランティア精神」への気付き	○「ボランティア精神」への近接課題 ボランティアに取り組む理由や条件、そして限界についての考察 a) 「原初」に関する問い掛け ・「なぜ、あなたは、そこで動き出すのか」 ・「なぜ、あなたの心が動いたのか」 b) a) の実践に関する問い掛け ・「なぜ、放棄や挫折があるのか」 ・「なぜ、そのことで苦しむのか」

### 3. 展開

本研究においては「ボランティアとNPO」の授業を「心の教育」の具体的実践と位置づける。つまり、下図のイメージの様に学生のボラ

ンティア精神という価値への近接を図る考察等の学習活動そのものが学生にとっての「心の教育」の展開となる。

【図2：「ボランティアとNPO」と心の教育】



#### 1) 構想

##### ①テーマ

##### a) 【実践の課題】

「ボランティア精神に関する考察」を通して、他者と関わる理由への気づきを図るための学習展開を工夫する。

##### b) 【考察の課題】

「ボランティア精神に関する考察」を取り入れた授業における「価値」への近接の可能性について考察する。

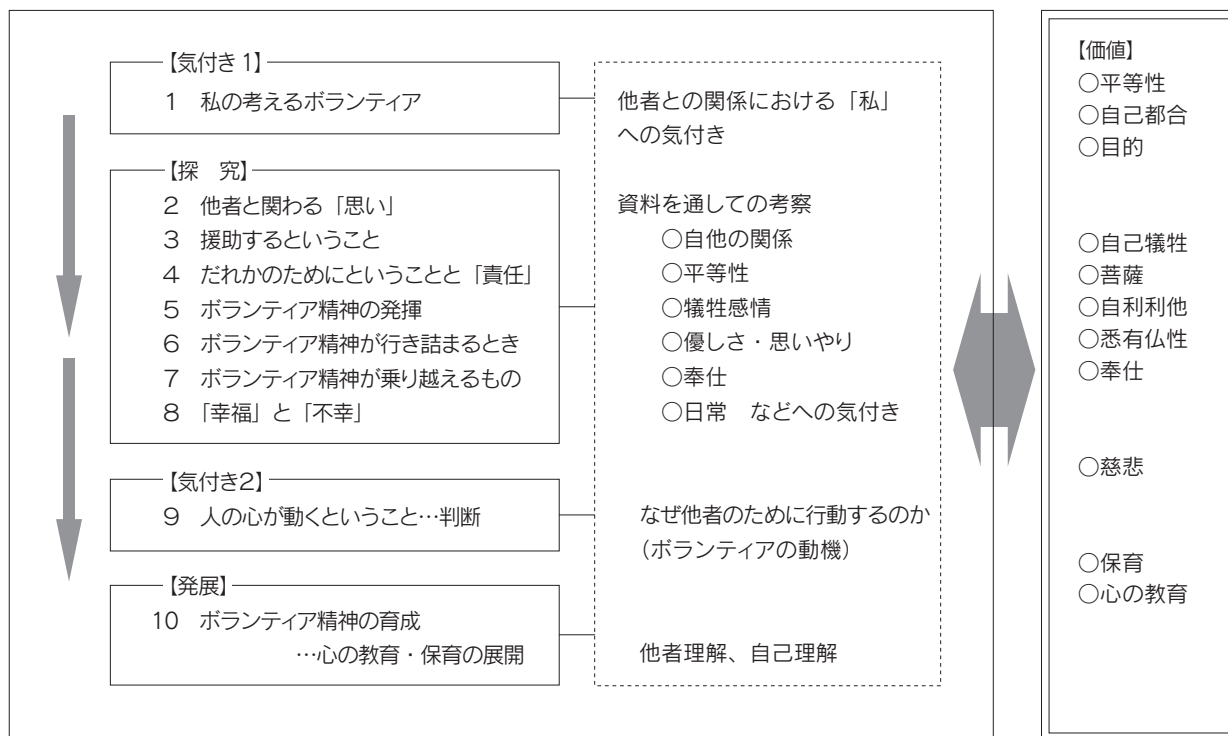
#### ②展開の手立て

##### a) 課題解決型の学習と段階の設定

学生の実態に応じた授業を構想し、それを活かす。具体的には、前述の4観点を解決の小課題のねらいとし、各段階における気づきを基に主題に迫ることができるように、課題解決型の学習を構想する。これは、学習課題の明確化を図りながら、学習者の認識の変容を促し、さらに変容理由やその自覚を図る学習活動である。



【図3：学習段階の課題と関連価値】



b) 段階

学習の展開において、学習者の課題解決をより有効に図るために、「気づき1」「探究」「気づき2」の学習段階を設けた。

「気づき1」の段階では、ボランティア（活動）に対するイメージを明らかにさせ、「私と他者」の存在と、活動の前提としての関係に気付かせた。さらにボランティア活動を「関係性」と捉えることをねらいとした。

「探究」の段階では、小課題の解決を中心に据え、資料を基にした考察を通して新たな気づきを図った。ここでは、ボランティア精神を考察する上で手掛かりとなる課題を設定し、気づきを更に深めさせるようにした。

主な課題は、○他者と関わる「思い」  
○「援助」 ○「責任」 ○「ボランティア精神」 ○「行き詰まる時」 ○「幸福と不幸」である。

「気づき2」の段階では、ボランティア精神そのものを考察させることを試みた。課題は、○人の心が動くことである。

ボランティア精神・ボランティア活動への動機や判断は、最終的な課題であり、関係性を支える人間の内面的な価値であり、根源的な課題であると考えられる。ここで課題となる「なぜそうするのか」という理由や判断についての考察は、学習の発展的な成果として、実践に向かう自身を動かすものへの気づきを射程に組み込んでいる。

③授業の重点及び留意点について

学生にねらいや価値を知らせるものではなく、学習の中心活動としての思考や考察を通じた〈気づき〉の変容と連続を図り、課題意識の発展・深化させるために、授業において以下の重点および留意事項を設定した。

a) 学生の思いや経験の肯定と受容

「心の教育」やその実践を否定することで、これまで営まれた教育的な事実やそこに含まれる生活や実人生を否定する可能性がある。学習活動において、その当事者であり教育的営為による教育的成果を具現している学生の

様々な事実を否定しないような配慮が必要である。

b) 「心の教育」の実践者の育成の手掛かりとしての「心の教育」

心の教育の重要性が叫ばれている中で、「心の教育」を担う実践者を養成することは重要な課題である。しかしこの課題を道徳について語るとき、その根本には常に「徳の教師」は存在するかという問題が潜んでいる。結局、「心」について学習することと「心」が育つこととは同じではない。ある学習プログラムや学習方法によって「心」について知ることとは、結局、各人において自己の内面的課題として活かされなければならないし、子供にあっては育てられなければならない人間性そのものである。それゆえ幼児にとって教師は人間として「一つのモデル」として存在することの意味はこの点においても、深く考察されるべきであろう。

c) 新たな気づきを創出する課題設定

考察の最終時点や学習活動の結果に、ある価値を提示するのではなく、自身の「ボランティア・奉仕」の概念を起点とし、さらに関連する気づきを活かしながら、価値への近接をめざす。それは論理性や既成の価値によって評価されるものではなく、自分の認識を高めていくという課題創出の態度の育成に通じると考える。

d) 実践の条件（学習条件）への配慮

「静」のイメージとしての座学中心の学習状況で、「動」のイメージとしての実践活動における内面問題に取り組ませるための工夫が要求される。

ボランティア精神について、例えば、「動」的な「揺り動かされる私の理由」「動き出す私」の考察にせよ、困難を感じたり、限界に気付いたりすることには、そもそも内面に湧き起こる「動」のイメージを捉える対極としての、また、前提としての「静」のイメージがある。その意味でも、学習場面を本実

践のような座学での考察に焦点化した場合、心情に関する実感的な認識は非常に難しく、十分な配慮を要すると考えられる。

e) 関係や状況を捉える視点への気づき

自他それぞれの存在に気づきながら、その関係という全体を包括的に捉える自身の視点が設定されなければならない。これは反省するという「振り返る」自分という存在ではなく、反省している自分を眺め、認めていく視点であり、新たな立ち位置と考えられる。これによって認められる自分さえもが包括されている「関係性」を見出すことができると考えられる。

f) 正解や共通する結論のない学習

心については誰もが語ることが可能である。「心の教育」や「ボランティア精神」への関心は、心への関心そのものであり、考察することはそれを語ることに等しい。ボランティアの成立条件に関係性を据え、それを語るとき、様々な語りの立ち位置が生じる。他者への認識、自他の関係への認識、自他の関係を捉える視点を確認する認識など、自他の関わりを捉え、同時にその視点にある自分の立ち位置を確保させることにむしろ力点を置くようにしたい。この視点の確保は各自の生活や人生の足元に気づき、生き方に関心を抱く、第一歩であると考えられる。

g) 様々な生活、事例、話を通じた学習活動の構成

資料に描写された日常考えられ得る生活風景で、関わりを持ち始めるときの自分の心情や態度を考えさせる。この場合、資料の適切性とその活用の適切性が要求される。また、学生にとって他者の現実生活を、学生が自分のことのように捉えるのか、他者の心情を他者のものとしてくみ取るのか十分に見取る必要がある。さらに、課題の提示とともに、学生の考察の語りの立ち位置に着目する必要がある。それは、

他者の問題を自分の問題とすることで「関係性」の中に身を置き始めるといふ新たな「関係性」が生み出される瞬間のできごととして、資料に対峙する学生の内面を理解する観点を工夫する必要性である。

2) 構想までの考察 (…本稿の考察にかえて)  
…振り返りによる課題の意識化

これまでの考察を一度振り返り、整理する。

学生は振り返りを通してボランティア観を再構築する過程で、自他の関係に気づき、ボランティア(活動)は自己の思いだけでは成立しないし、立ち行くものではないという認識にたどり着いた。

「雨ニモマケズ」(詩・宮沢賢治)を基に、他者に関わろうとする思いと、むしろ自分の思いの展開だけでは報われない結果との同時性(相依相関)をも確認した。さらに、そこでは宮沢の仏教観(信仰観)をベースに、特にその行為をひとつの菩薩の行と理解し、菩薩が目的とする救済を必要とする世界がそもそも現前に展開していることを前提と捉えた。

この前提は、結局、自身もまたその世界に生きていることや、同じ人間同士の関わりにおいてどのように「奉仕」や「役に立つ」ことができるのだろうかという課題意識を生み出す。そしてそれは、自分自身も実は、弱い、救われたい人間であるという同じ地平に関わって立つ存在であるという認識に他ならない。同時に、学生がこの関係に気付いたときに抱いた非力感や、躊躇される優位者の感情は、この地平観によって根本的に否定されている。しかし、本実践ではむしろその非力感を乗り越えて、「それでもボランティア活動、ボランティア精神」が可能であることを追求する課題意識に向かわせることができた。つまり、学生自身が課題に沿って自らの関わりや実態を明らかにすることで、普段何気なく使用している言葉や生活の中にある事象に込められた価値の存在に気づき、価値を具現する具体的実践や近接の可能性を追求する態度の下地を形成することができたと考える。

【文献】

- 一番ヶ瀬康子、福祉を担う人びと、一番ヶ瀬康子 社会福祉著作集 第五巻、労働旬報社、1994  
五木寛之・森一弘、神の発見、平凡社、2005  
久保田正文、日蓮 その生涯と思想、講談社、昭和42  
中村元 監修、新・佛教辞典 増補、誠信書房、昭和55  
中村元、温かなところー東洋の理想、春秋社、1999  
太田直道、揺れる子どもの心、三学出版、1995  
太田直道、生き方の道徳教育ー現代道徳哲学二十講、三学出版、2008  
上杉賢士・田中雅文 編著、第一部 ボランティア活動の教育的意義、小学生のボランティアスピリットを育てる、明治図書出版、1997

【ほか】

本稿は、平成20年度 日本教育学会 第67回大会 一般研究発表Ⅱ (36.【一般b-13】心の教育と仏教② 平成20年8月30日 於：佛教大学)にて発表した「保育者養成における『心の教育の試みⅠ』ーボランティア精神についての考察を通してー」の実践研究の内容を、価値への近接を図るための資料の選択という課題と学生の気づきを通じた認識の変容という観点から改めて捉え直し、考察したものである。